

安芸高田市学校規模適正化委員会（第5回）議事録

平成21年10月15日（木）19:00～21:15

クリスタルアージュ 小ホール

【議事内容】

事務局【答申書（素案）「4 学校適正化に向けた留意点」までを資料説明】

委員長

- 今まで議論したことであり、1～3は確認していただきたい。その後、素案でご意見を伺いたい。

委員

- 答申書素案は、話し合いの意見を踏まえることが重要であると考えますが、印象としては第1、2回で事前配付された資料そのままの印象が強い。話し合いの結果がきちんと盛り込まれているのかどうか。委員会として、効果よりも課題が多いといった印象がある、全体としてやや偏っているのではないかと。

委員長

- 1～2は教育委員会から提供した報告資料で、事実や現状となっている。論議ではない。将来予測、施設の現状などについても報告の扱いとなっている。3については実質的な議論であり、実際に出された意見である。

事務局

- 提出した現状資料を編集している。3の意見も委員会で出された意見を踏まえたものである。修正指示があれば指摘してほしい。

委員長

- 3は、課題ではなくむしろ問題であり、どうすべきかをもっと記述すべきかも知れない。その結果、学校、教育委員会で取り組んでいる努力や内容が浮かび上がってくるのではないかと。それこそが課題であると考えられる。

委員

- 答申書では議論していないことを記述するのはおかしい。学校規模の適正化を議論しているが、関係のないこと、不必要なことは本文から除くべきである。
- 事務局ではないコンサルタントが資料説明するのはおかしいのではないかと。コンサルタントに任せっきりでないのか。また、委員長は答申書の起草に参加しているのかどうか。
- 委員長は司会進行に徹してほしい。意見を述べたい時には一委員として述べてほしい。

委員長

- 素案を含めてきちんと関与している。コンサルタント、教育委員会、委員長として表現などを含めて検討し、素案をまとめた経緯がある。委員長は単なる司会進行ではないと考えている。

委員

- 課題に対して学校や教育委員会が取り組んでいる対策を具体的に記述してほしい。多くの課題が問題となっているように読み取れてしまう。

委員

- 児童数が減少傾向の中、郷野小学校では30数名の全校生徒の中、過去2年間で5人もの転入者がいる。資料のグラフ通り下がっていくとは思えない。増えていく可能性もあるのではないか。

事務局

- 10年先まで見越しているが、確実とは必ずしもいえない。現在の子どもたちがそのまま成長した場合を前提としている。転入・転出の可能性は算出過程に含んでいない。あくまで傾向をみてもらう資料である。

事務局

- 推計する方法はさまざまであるが、現実的には直近の数字を積み上げた方が現実的な数字になる場合もあり、こうした推計方法を採用している。全国的に少子高齢化が進展しているわけで、安芸高田市だけが児童数が増加する傾向になるとは考えられない。また転入だけではなく、転出も多いと認識している。

委員

- 最近数年間、中高一貫校への進学が多くなっているのではないかと。特色ある学校づくりを行っていると思うが、もっと地域にアピールしていくことが重要ではないか。市内からこうした中高一貫校への進学している実数はあるのか。

事務局

- 中学校進学時に市外に進学しているのは、毎年10人前後であり変わっていないと考えられる。また、特色ある学校づくりのアピールは、公立6中学校とも保護者、地域から強く信頼されていると聞いている。今後一層特色ある学校のアピールする努力はやっていきたい。

委員

- 今回の答申書は中間又は最終答申かどちらか。
- 資料は答申書となっていたが、一定の結論を出すには到っていないのではないかと。最終的な結論を出すのかどうか、議論しておくべきである。

委員長

- 教育長から諮問を受け、答申を出す必要があるため、答申書となっている。

委員

- 答申を出すのは当然であるが、タイミングが問題である。今それだけの議論を尽くしたのかどうか。

委員長

- 報告書ではなく答申であり、素案であり、次に中間報告で出すことになる。最終答申ではない。

事務局

- 私学に流出している人数は、14人、4.6% (H18.3)、15人、5.2% (H19.3)、9人、3.3% (H20.3)、10人、3.5% (H21.3) となっている。並行して推移していると感じている。

委員

- 学校規模の適正化に関して、少人数の効果、課題に対する対策などを知りたい。先生への負担解消に向けた方法を考えていくことが必要である。また、保護者の努力についても記述すべきである。対応方法を資料として出していただきたい。一方、大きな学級についても効果、課題もあり、資料として出していただきたい。その方が、具体的にどうしていくべきか考えやすいと思う。

委員長

- 市内には大規模学級が少ない。小規模少人数が大部分であり、それに焦点があわされている。

委員

- 市内には複数学級もあれば、30人を越える学級もある。それぞれの課題と対策を知りたい。

事務局

- 効果と課題であるが、具体的に制度上の対策としては、学習補助員の配置、A L T 5名を配置していること等がある。ここに記載されていることの大部分は、学校教師が努力の積み重ねで課題解決がなされている。
- 答申をしたのは複式学級をどう解決していくのが論点である。いろいろな論点が整理されつつある。市内には大規模校はないが、40人近い学級を見ていただいた。学力を含めて対応できない場合があるので、20～30人の整理をさせていただいた。それ以上はチームティーチング、主要教科による少人数学習担保などを考えていかねばならない。

委員

- 学習補助員、A L T 配置もあるが、その問題を、具体的に知りたい。複式学級の場合で学習リーダーが育たない場合、学級運営が困難な場合にどのように対応されているのか具体的に知りたい。どの程度課題がカバーされているのか知りたい。生活面、学習面でどのような細かな課題があるのか分からない。

事務局

- 制度論的には、以上の通りである。例えば、ある小学校で、課題がある子どもがいた場合、学習補助員が該当の子ども専属に対応することになる場合がある。学習補助員をどのように使っていくのかは各現場の判断による。
- やや大規模校の問題は、各教師の個人的な努力に支えられており、それを学校等の教師集団が支えているのが実態である。これは、現在の制度の中ではどうすることもできない。

事務局

- 複式学級での具体的な努力については、学習リーダーが育たない場合は、発言形式を子どもに譲ける、リーダーノート（シナリオ）を持たせるなどの方法がある。すべて教職員が必死で努力をしている状況である。具体的な手法を答申の中に入れるのは難しいのではないか。会議の席上で回答するのは可能である。

委員長

- 「育たない場合は」ではなく、「育てるためには相当な努力が必要であり」、といった表現がよい。実際にやっていないわけでない、また、相当な負担にあるともかけない。教師でありやって当然であるためである。こうした表現は答申の中では記載できない。

委員会の中では、教師の努力無しに課題があるのではない、ということを理解してほしい。その上で、一般論であるかも知れないが、規模の適正化を議論してほしい。このように、効果と課題は配慮した書き方にしてほしい。

委員

- 第1回資料に文部科学省作成の学校規模のメリット・デメリットがあるが、今回答申書を比較すると、効果が少なく課題が多くなっている。メリット・デメリットについては数を揃えた方がよい。その上で議論をした方がよい。

委員長

- メリット・デメリットで示されているが、バランスを取っていく努力は必要ではない、メリット・メリットともに単純な意味ではなく、教師や学校の努力に支えられた結果であることを配慮してほしい。

委員

- 課題が多いので、違和感がある。これまでの4回の委員会で課題が多く出た印象はない。

事務局

- 委員会で出た意見をそのまま記述している。重複している箇所は削除している程度であり、整理しただけである。

委員

- 感想としては〇〇委員に近い。答申が既にここまでできあがっている印象である。また、方向性が強く出すぎている印象である。
- 良い面は、先生と子どもたちに信頼関係がある学校がよい、すべての学校がそうであると感じた。子どもたちは静かな環境で育つと平和な心を持つ、存在を認められると自分を好きになるといった傾向がある。
- 小規模校出身者は人間関係が触れ合い症候群になりやすい、触れ合い恐怖症症候群、一人の世界に閉じこもりやすい等がある。
- アメリカの例であるが、地域に負担をかけないように、スクールバスが整備されている。バスの乗車時間内にも教育効果が配慮されている。地域へのフォローがどう配慮されているのかが重要である。結論を急ぎすぎている印象である。

委員

- 郷野小学校学区に居住しているが、良い面は郷野小学校が木造校舎であり、生徒数が少ない、校庭が芝生化している。休みには芝生を素足で活動している。郷野小学校の学力・体力も中学校に進んだ場合、良い評価と聞いている。逆に吉田小学校は過密ではないか。
- 運動会等が小学校だけではできない面がある。父兄、高齢者、地域が一体になる必要がある。出番が多くなりがちである。少年野球、バレーボールなどのクラブ等が強くない課題がある。小規模校ほど、地域が献身的に支援、維持している状況がある。小学校側としては地域にさまざまな形に返していくことが必要である。敬老会の行事への参加、交通安全への取組、グランドゴルフ大会などである。郷野振興会が中心となって支えており、大規模校と小規模校それぞれの良さがあるのではないか。木造校舎は耐震化が課題である。何とか残す方向でお願いしたいが。郷野小学校の赴任してきた先生の

うち、初めて地域との関わりの良さを感じた先生もみられる。

委員長

- 制度の差もあるが、地域から教育税を取る方法ある。その中で運営もある。触れ合いのある教育がなされている傾向はすばらしい。地域が一体として運営しているのは良い面ではないか。一概には良い、悪いは言えないのではないか。

委員

- 吉田町の中で、丹比と郷野は高齢化が高い地域である。高齢者が担い手になっているのが現状である。地域の中で高齢者、PTAなどが連携を取るかが重要である。

委員

- 目指すべき教育目標に、地域に開かれた特色ある学校、地域と連携した学校運営があり、PTAの力を借りながら運営せざるを得ない学校の方が、教育目標の達成には好都合ではないか。小規模校が望ましい姿ではないか。

委員

- 生徒の数が少ないと、子ども同士の多様な考え方に触れる機会が少ないなどの指摘があるが、研究した人がいるのかどうか。安芸高田市の学校は、なんらかの実証されている。感覚的、主観的な話をしても仕方ないと思う。

委員

- 小規模では社会性に対して適応できるのかということに関して、本委員会に校長がいるので、尋ねてみたい。

委員

- 少人数と大規模人数での根拠の数字は出せない。集団の中で少ないと集団に加入されない場合がある。30人くらいいると誰かと集団ができる傾向はある。少ない場合には、保育所などからの関係がそのまま持ち上がって、固定化する傾向もある。

委員

- 小規模校の良さは本委員会でさまざま指摘されている。しかしながら議論すべきは、今このままでいいのかについて、大人が責任を持って対応すること、検討することが問われている。このままではもっと少人数化が進むことは明らかで、子どもたちに将来的にしっかりした自立できる力を付けていく責務がある。スポーツ、人間関係、地域等においていかに意欲をかき立てられるかが重要である。このため、適度な人数、競争の中での教育を行う必要がある。学級では2～3人くらいだと意欲が本当につくのか。グローバルな時代に対応できる人材になるのかどうか。適度な人数と競争心の中で考え方、生き方に触れ、価値観・思想を膨らませる教育を行うことが必要である。今考える時期にきている。
- 県内でも同じような答申が出てきている。地域として苦渋の決断をして統廃合、適正規模の方向性を出しているのだと思う。安芸高田市だけは例外だとは言えないと思う。

事務局

- 効果と課題は、授業参観等での意見交換等を含めて整理している。結果として多寡が出てきている。具体的な指摘をされれば修正したい。
- とりまとめ方としては、今後、中間報告案として提案し、市民のパブリックコメントを受けたい。最終報告ではなく、市民に対してのとりまとめ案として理解をしてほしい。

時間的制約があるが、今年度に答申をいただきたい。

- 現状をどうするわけではなく、今後の複式学級化していく対応が急務となっている。現在の地域が支えている小規模校に深く立ち入ることは考えていない。

事務局

- 基本的に記載されているのは、委員の中で議論がなされたことを記載されている。研究的な裏付けはない。ただ、実際、多様な考え方が少ない、自分の考え方を深めることが少ない等については、事例が実際にある。集団に入らない子どもたちが小集団を見つめることができない。集団が固定化し、序列化がぬぐい去れない傾向もある。
- 授業の中では、1～2名の学級では、同じ考え方しかない場合は、教師が反対意見を言う、指人形で多様な考え方を提案する。こうした努力に支えられている。多様な価値観に触れることが少ないことは事実である。

委員

- 各市答申は20～30人、複数学級がよいとされているが、根拠が示されていない。検証した結果に基づいた結果ではない。よそがやっているから正しいわけではない。
- 適度な数と言ったが、10人であれば適度ではないのか、分からないとしか言えないのではないか。10人ではダメだとも言えない、根拠もない。一般的にどうかという議論であり、一般的な結論は出せないと思う。
- 一定の結論を示し市民にパブリックコメントであれば、結論が出ているのではなく、いろいろな議論があると言うことをそのまま市民に出してほしい。現在は、結論を急ぎすぎている。耐震化は適正化委員会では関係ないと最初の委員会では述べられたはずである。

委員

- 小規模校に通わせているが、コミュニケーション能力が劣っていると感じている。小規模校擁護の意見が出てくるが、市内の小学校に通わせて良いか不安になってくる。いろいろな環境の中で、可能性を高めてほしい。そのためには学習やスポーツ面でも競争が必要である。根拠がないが、親の勘として能力が最大限活かされていないと感じている。私立学校に行った子どもたちの表情を見ると羨ましいくらいいきいきしている。プラスバンドもない、クラス替えもない等寂しい限りである。子どもたちの反応が心配である。
- 自分の考え方としては、私学に行くしかないのではないかと感じている。安芸高田市で1中学校になり、素晴らしい中学校になれば、私学以上に通わせるのではないか。近いからではなく魅力づくりのために対応を期待したい。ある程度人数がいる方が望ましい。

委員長

- 答申案の議論をしたいが、時間の関係でそこまでは及ばない状況である。小規模校について、効果と課題に努力をしていることを含めて整理をしたい。
- ある程度の学校規模の考える上での意見を整理している。飛躍があるかどうかについて、4についても議論をいただきたい。

委員

- 前回でも20～30人の意見が多かったが、このままでの文章案では、統廃合しかないと

いう印象を受ける。慎重かつ現実的な対応とは述べられているが、もう少し個別地域に具体的な文章がないと危険な感じである。こうした表現は、抽象的すぎる。

- 具体的には小規模校を否定するものではないとあるが、どうしても規模の確保を目指すことが強い印象を受ける。人数の規模は、20～30 人が適正だとは感じる。これ自体は誰も反対はしないと思う。問題は配置の部分でいかに考えるかということである。

委員長

- 検討課題として p19③に配慮事項として、一応は述べられている。

委員

- 委員会の名称として適正が望ましいのだろうか。適正以外は間違いなのか。正しいのは複数学級で、20～30 人が望ましい、それ以外は許容しますというのはおかしい。原則と例外を決めてしまうのは問題である。適正の根拠はない。
- 中学校は全市で1校くらいにまとめる形にならざるを得ない。20 人を満たしている学校はほとんどない。適正ではないという結論は良くないと思う。

委員長

- 現状が正しい、現状が間違いではない。教育条件を高めていくためにどうするのかという議論である。学校自体は40 人学級が基本であり、複式学級は例外である。それとは別に安芸高田市の望ましいあるべき人数を掲げようとしているものである。教師の配置が規定で決まっており、どう手立てをしていくのか、可能なのかといったことを考えようとしているものである。議論は最初に戻っていくことになりかねない。
- 最もふさわしいことを考えていくことが適正化と言うことである。正しいか間違っているかは分からない。将来的に考えていくべきかが適正化の議論である。1校に集中することにはつながらないと思う、しかしながら親の思いに応えていくことも重要で、本委員会で考えていくべきである。
- 素案についての結論を得ないまま時間がきてしまった。どうすべきでしょうか。

委員

- 中間報告書の素案の骨子を持参したので、配布したい。次回までに検討をお願いしたい。

委員長

- 配布していただいて、案を次回提示して、議論をしたいと思う。

事務局

- 説明がなかった答申案全体について検討をお願いしたいと思う。
- 次回委員会は、11 月 26 日（木）の 19 時からでお願いしたいと思う。本日はありがとうございました。

以上